無政府主義の父 (五)

バクウニンの生涯

大杉榮

[illegible]一年十二月二十七日、[illegible]ンはヘルツエンとオガ[illegible]に迎へられて、ロンドン[illegible]の雜誌の[illegible]オガレフが、當時のバクウニンに就て語つてゐる。

◇バクウニンがシベリアを逃亡して來た事に就いて、カヴエリンがヘルツエンに手紙を書いて「私は此の人を氣の毒だと思ふ。しかし私は同情はするが、私は彼れを決して信用しない。そして彼れから何等の善い事をも期待しない。彼れがロシアを立つた仕方は餘り立派なものぢやない。ひどく不正直なものだつた」と云つた。そしてバクウニンは、ロンドンに着いてから「僕は僕はそれを恥ぢてゐるんだ。此の自由を獲るには僕は友人達を瞞さなくちやならなかつた」と云つてゐた。

◇猶ほ、此のオガレフ夫人に據るに、「ヘルツエンはアメリカから送つて來たバクウニンの手紙を讀んで、オガレフに云つた。「僕は君に白状するが、近くバクウニンがやつて來るのは僕には大きな不安だ。きつと彼れは僕等の仕事をめちやくちやにして了ふだらう」

◇オガレフも同じ意見だつた。彼れはバクウニンがプロパガンダだけで滿足しないで、ヨオロツパでの革命運動の舞臺に自分の影響を及ぼさうとするに違ひないと思つた。バクウニンは西ヨオロツパでは熱心なポオランド贊護者と見られてゐた。ヘルツエンやオガレフもポオランドには、其の受けてゐる苦痛には、同情してゐた。しかしポオランド人の[illegible]に對する[illegible]などには、其の[illegible]は批難してゐた。

◇「ヘルツエンの懸念が直ぐに實際になつた。

◇「バクウニンの到着と共に、ロシアの『自由出版物』だのポオランドに對する同情の運動が起つた。最初僕は『鐘』に其の論文を發表した。が、ヘルツエンはバクウニンのポオランド的傾向を見て、其の意見が違ふからと云ふので、バクウニンに小冊子で其の論文を發表するか、或は『ロシア評論』と云ふ雜誌の雜誌で發表するがいゝと云ひ出した。

◇「そして非常に困つたのは、オガレフとバクウニンとの意見がひどく接近して、バクウニンがオガレフに著しい影響を及ぼし出した事であつた。ヘルツエンは一つでも、オガレフが自分の間違ひを氣づいてゐる時にでも、オガレフに謝つてゐたのだつた。」

◇ヘルツエンとバクウニンとは全く違つてゐた。ヘルツエンはたゞ自分の力や又は其の國民の力に相應して思想の宣傳をする事だけにとゞめた。が、バクウニンは革命的行動を望み、實際の戰爭にまで進まうと思つてゐたのだ。彼れは又、ポオランドの一揆に對して其の理論的見解から見て自然な以上に非常な同情を持つてゐた。

無政府主義の父 (六)

バクウニンの生涯

大杉榮

[illegible]バクウニンがロンドンに來て[illegible]ヘルツエンはオガレフ一家を世話してゐたほかに、バクウニンの生活をも負擔しなければならない事になつた。

◇バクウニンの此の生活費に就いては、一八六二年一月二十五日附の、ドツルゲエネフからヘルツエンに送つた手紙の中にも書いてゐる。

◇[illegible]君。バクウニンの事だ。[illegible]集めてやる事は[illegible]以上前に[illegible]ロシア人はとても當にならないで、彼れのためにしてやる事はどうしてもロシアの方でなければ駄目だ。僕個人としては、[illegible]んで毎年千五百フランを貸さう。そして其の最初の三分の一を今君に送る。これで君が必要な額（六千フラン）の四分の一だけ[illegible]集まつた譯だ。」

[illegible]四月十一日に、ドツルゲエネフは又同じ調子でヘルツエンに手紙を送つてゐる。

「[illegible]（バクウニンの）お弟子[illegible]がこゝへ來た。[illegible]のやうにぎりぎり齒ぎしりをしながら、ながながといろんな議論をした。そしてラファル見[illegible]の所持品を置いて[illegible]つて行つた。そこへは、ミシエルが借りた一千フランを返さなくちやならんのだそうだ。僕は其のために寄附金を集めた。が、それはほか僕自身が五百フラン出したほかに僅か二百フラン集まつた。

「バクウニンは僕に一千ルウブル送つてくれと云つて來た。僕は僕の出す[illegible]前にこれを送らうと思ふ。[illegible]用立金の前に貸した五百フランと此の一千ルウブルとを加へると丁度三年間にやる年金の金額よりもちよつと少い金額になる。

「それから、今度細君を呼び寄せるのは思ひとまらしてくれ。全く馬鹿な事だ。少しは考へるひまを持つがいゝ。」

此の手紙に據ると、バクウニンは其の細君をロンドンへ呼ぶようにドツルゲエネフのところへ云つてやつたものらしい。そしてドツルゲエネフはバクウニンに其の助力を約束して、から附け加へて云つてゐる。「此の事に就いても、其のほかの事に就いてと同じやうに、君は君によつて對する僕の古い友情は、有りがたい事にいふ。此の友情は、政治上の意見などで變りはしない」

猶、一八六四年四月二日の、やはりヘルツエンに宛てた手紙の中にも、ドツルゲエネフはバクウニンの事を書いてゐる。

「僕から金を借りてそして其のお禮を云つたと思つて僕を[illegible]にいやな地位に陷れたバクウニンは、猶多くの人が彼れの[illegible]のために身をそこなつてゐるのだが、此のバクウニンは僕に對して惡意に無茶なそして非道い罵言を投げた。これは當然の事だ。[illegible]前から彼れを知つてゐる僕は彼れがそれ以外の事は期待してゐなかつたのだ。」

が、かうして其の政治上の意見の違ひから二人が別れた後にも、バクウニンの病氣の時とか困難の時とかには、ドツルゲエネフはやはり彼れに內々で彼れを助けてゐた

幸徳秋水の追悼會を催した在阪社會主義者

[illegible]

卑猥な映畫で赤化の宣傳

京濱間聯絡を取りて露國から續々密輸入

―板倉子爵の長男が首謀

[illegible]東京市內各方面で風俗を紊る猥褻の活動寫眞を[illegible]で秘密裡に待合其他で映寫して利益を占むる惡風行はれ[illegible]しいので一掃されてゐたが此頃又も花柳界一帶に亘り露國から輸入の猥褻フイルムを秘密に映寫し若しくは該フイルムを

密賣して

ゐる者あるを探知し數日前から刑事を各方面に派し是が捜査に努めた結果二十五日夜に至り[illegible]下落合五三四子爵從三位板倉[illegible]長男板倉勝央（二三）[illegible]外一名と[illegible]フイルムを押收した[illegible]であるが押收したフイルムは

十數種類

で[illegible]ルム中に赤化宣傳に努めて居るのがあり一寸見には判らぬものである、露人の氏名は判明せぬが昨年來浦潮に往復しつゝある佐藤等と共謀し浦潮の某露國人から買入れたものらしく偵

裏面には

京濱間[illegible]の某々露人及東京市に於ける有力なる某々活動寫眞會社等も關係して居るので刑事は殆ど全部總出の狀態で引續き活動中である